

海外遠征三題

1. カリマンタン
2. トラツク諸島
3. 大韓民国〈1〉、〈2〉

海外遠征が最近富に活発化されてきた。昭和44年春カリマンタン、トラツク諸島、韓国、昭和44年夏、第二次韓国。果たして彼らはそこで何をしようと
したのか、又何を得たのであろうか……………。

その 1

カリマンタンのこと

松 宮 満



はじめに

私はカリマンタン遠征計画のための第1次偵察隊の一員として昭和44年3月16日の夕方、人影もない荒天下の那覇港よりボルネオへ向かう貨物船「悠光丸(3,000トン 東京小山海運)」に乗った。

隊長西田信隆、隊員徳田隆一、同松宮満

その際の、隊の行動なり、記録の詳細は別の報告書に譲るとして、ここではこの計画に参加した私の見たこと聞いたこと感じたことなどを、あれこれと私なりに書いてみようと思う。いわば「雑感」である。

昭和44年3月21日18時 — 我々は赤道を通過して南半球にはいつた。言うまでもなく、私にとって赤道を越えるのは生まれてはじめての経験である。

かつて、私がはじめて「赤道」ということばを知った頃、そして世界地図の中央に引かれた赤い線の意味を知った時、私はこの地球を南北に分かつ赤い帯が大洋を横切り、大陸を横断して遠々と続く光景をはつきりと脳裏に浮べることができた。

「いつかはきつと、この赤道というものをこの目で確かめたいものだ。それはきつとすばらしい景色にちがいない。」

私は長いあいだ、そう思い続けてきたが、しかし世間によくあるように、私も、成長するに従って身につけてきた多くの「常識(知識)」によつて、この子供心の夢はあつかりと否定され、それはひとつの幻想となつてしまった。この小さな出来事は私の成長を物語っているのかも知れない。勿論、今日の社会に行きようとする我々にとって常識と言われる程度の知識は不可欠かも知れない。だが、私は常識人間になることを恐れないでは居られないのだ。夢を、幼い子供の心を、どこかに置き忘れてきてしまった人がもし居るならば、私はその人を不幸だと思う。

果てることを知らぬげに、洋々と広がる穏やかな海の碧い水を割つて進む船のデッキにたたずみ我々の船に驚いて数十メートルを飛翔するトビウオの群を眺めながら。

「それでもひよつとすると赤い帯の走る様を見ることができないとも限らない」

と赤道直下でそんな事を思い出し、ふと、水平線に目をやると、西の空を紅に染めて今にも太陽は水平線の彼方にその姿を没するところである。しかも、奇しくもその日は3月21日 — 春分の日である。太陽は真西に沈む。そしてその時、赤

光は海に映え、波頭を染めて紅くきらめく一条の帯となつた。あたかも緯度零に横たわる赤い帯のように —。

そして夜 — 昼の主役太陽の沈んだ後の空では煌々と輝く月と、そして無数の星達の出番である。私は太陽と月について次のような文章を読んだことがある。

「ときには太陽は孤独な男性であり、星々を連子とする女性である月を恋し、日夜天空を追っているかもしれない。ときには月も男性であり、女性である星々の支配を太陽とあらそっているのかもしれない。あるいは月は虹を昼の世界のおのれの使者とし、太陽は銀河を夜の世界のおのれの使者として、宇宙の王座を仲よくわけあつているのかもしれない。(北沢方邦「丸木舟の旅」『海』創刊号)

3月22日。再び太陽の昇るころボルネオは目の前にあつた。巨大な入道雲の浮かぶ空と、穏やかな海との接するところに緑の線となつて静かに横たわつていた。

思えば我々がこのボルネオ遠征を企ててから二年余。この歳月は長い割には短くて、楽しい割には苦しかったことだ。

「ボルネオへ行こう。」

大学生となつて間もないころ、フィリピンから帰つた先輩の一人に声をかけられたのがきっかけであつた。

味気ない、そして意識に行動を伴なわすことのできないでいる自分自身を嫌悪しながらイライラと落ちつかない高校生活を経た私にとって、大学はそれまで考えてきたことを実行に移すべきところであつた。それが何であろうとも良い、とにかく行動することに意義を見出そうとしたのだ。その手始めとして私は大学入学と同時に探検部に入

部した。「探検」がしたかつたからである。さて、探検については、解釈も人それぞれであり、勿論私は私なりの探検論を持つているけれど、それは別の機会に譲ることにして――。

私がボルネオに行こうと決心したのは、そんな、言わば狭苦しい鳥籠から解放された小鳥が――

「さあ！これで自由だ。どこへ飛んで行つてやるうか。」

と息込んでいるかの如き時であつた。

――結局それが、前よりも多少大きな籠に移されたに過ぎなかつたのかも知れないが――

もつとも、そのころの私はボルネオについて、否、東南アジアについてさへほとんど無知であつた。私にかぎらず、日本人全体の傾向として一般に東南アジアへの関心は欧米諸国へのそれにくらべると格段に低いようだが。人類学者(?)の梅棹忠夫氏は

「(近年日本ではマスコミをはじめとして東南アジアと言うことが多く使われるようになったけれど)わたしたちは、東南アジアについていたい何を知っているというのだ。ほとんど何も知らないではないか。はずかしいことながら、わたしも行つてみるまでは、実に貧弱な知識しかなかつたのである。わたしにかぎらない。とにかく、驚くべき程度の知識であるといわねばなるまい。相当のインテリから、『タイというのはシヤムのことですか』という質問を、わたしは何度も受けた。別に、『話の泉』式の知識が大切だとは思わないが、アジアの国の名前くらい、知つていてもよさそうなものではないか。」(梅棹忠夫「東南アジアの旅」から 中央公論 1958年8月号)

これは昭和32年に書かれたものであるが、現に私も梅棹氏と同様なことを何回も経験してきたと言うことは、10年以上経つた今日に於ても尙まだ、このようなことは言い得るようである。我

私の企画は(少なくとも私の場合は)最初の段階ではまず、未だ見ぬ日本以外の土地、すなわち外国への憧れ、赤道直下、大密林への憧れ、そしてその中で営まれているであろう原始共産制への憧れ、所謂単純な漠然とした「未知への憧れ」に過ぎなかつたけれど、その憧れを深化、具体化、現実化するためには系統的・組織的な資料収集、渉外活動が必要である。そこで関大探検部の中には「カリマンタン遠征企画委員会」を設け、この憧れを実現すべく努力をはじめたわけであるが、その際、多くの様々な方面の人々に会つていろいろな話をする機会を得た。その人達は何らかの形で東南アジア、特にインドネシアに拘りを持つ人が多かつたこともあつて、皆さんそれぞれの分野にそれぞれ詳しく、一部の例外を除けば、ほとんどすべての人と好意的に親しく話合ふことができたことは我々にとつても幸いであり、得るところも少くなかつた。が、しかし、その知識も専門外のこととなるとどんなものであろうか？私の体験からも、先に引用した梅棹氏とほとんど同じ例を挙げることができる。

と言うのは、私の場合も所謂インテリと呼ばれる層に属する、ある紳士とボルネオについて話をしている時である。その人はどうにも納得のゆかぬことをしばしば言われるので、よくよく注意して聞いてみると、何と！その人はインドネシアとインドを同一の国と思ひ込んでいたのだ。この人の場合は例外だと言われるなら、私はこれに類する例を他にいくつも挙げることができる。まだまだ東南アジアに対する関心は低いようである。

ところで、私は先程から「ボルネオ」という地名を何度も使つてゐるけれど、厳密に言うところには誤りである。「大韓民国」を「朝鮮」と呼ぶのが誤りであるように(この例は必ずしも最適ではないかも知れないが――)。

「ボルネオ BORNEO」とは、先に掲げた地図を参照していただければ明かなように、赤道直下の北緯 $7^{\circ}20'$ ～南緯 $4^{\circ}20'$ 。東経 $108^{\circ}53'$ ～ $119^{\circ}22'$ 、すなわちアジア大陸の東南部と東印度諸島およびフィリピンとに囲まれる環状海面の中央に位置し、わが国の本州の約3倍にあたる $746,000\text{km}^2$ の面積を持つ世界で第三番目に大きな島「ボルネオ島」全体を指しているのである。（因みに世界で一番大きな島はグリーンランド、二番はニューギニアである）ところが、我々の目指すのはこのボルネオ島の中でも「カリマンタン」と呼ばれる地域なのである。

さて、ボルネオの名は、かつて大日本帝国の版図に含まれたこともあつたりしたので聞き覚えのある人も多かろうと思うが、カリマンタン — というこの明るい響きを持った地名には聞き覚えのある人はさほど多くないであろう。『カリマンタンとはどこのことですか』という質問が、我々に対する最も多い質問の一つであることから想像できる。

では再び地図を見ていただきたい。島の北からほぼ四分の一のところ国境線があるが、ここまでがマレーシア領（ただし、ブルネイは英国保護領）で、ここより南四分の三がインドネシア領であり、ここがカリマンタンと呼ばれる地域なのである。この国境線が第二次大戦後発火した帝国主義、植民地主義と民族主義の争い、さらには今なお内燃している民族主義と民族主義との争いの一部を示すものであり、インドネシア対マレーシアの対立紛争に於けるサラワク、そしてそれにフィリピンを加えたサバ州帰属紛争の舞台であることは、昨今のマスコミの報道に詳しい。

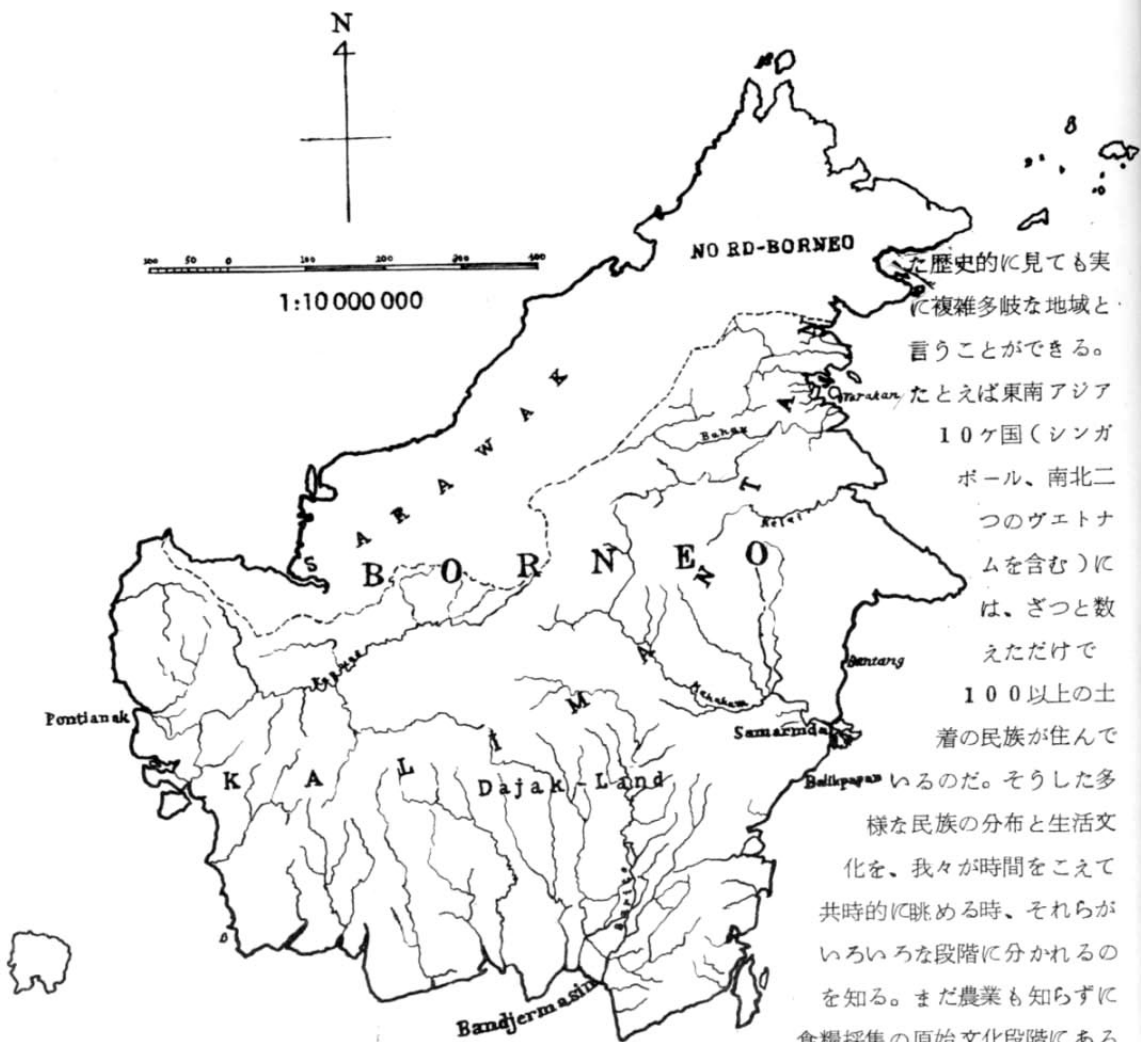
世界地図にも明かなように、東南アジアはアジア大陸とオセアニアをつなぐ橋梁地帯であり、シナとインドの過渡地域でもある。さらには東の

太平洋、西のインド洋を区切っているので両大洋間の関門地帯とも言うことができる。そして新石器時代の昔から、さまざまな人々がそれぞれの文化を携えてここを往来したのである。この地域を称して「文明の十字路」と呼ばれるのもこの所以であろう。このように、ここは交通の要地であると同時に、シナ・インドと並ぶ富の蔵でもあつた。かつてオランダはインドネシアを「赤道の上にかけられたエメラルドの首飾り」にたとえたが、これはその豊かさを表すものである。

こんな状況の中にあつて、ボルネオのその存在は古くから知られており、マライ半島、スマトラを中心とするマライ人は早くからボルネオを海岸地帯に移住をおこない、先住民であるダヤク族（プロトマライ）を奥地へ追いやつたが、さらに歴史時代になると、北から華僑が、南からジャワ人が、東からブギ人が時々の、それぞれの文化をもつて移り住んだので、彼らを受け入れることのできない先住民はますます密林の奥深くへと追いやられていつたのである。

幸か不幸か、ボルネオの自然環境は、島というもののその面積は巨大でほとんど大陸的な大きさを持ち、中央には大きな山地を擁し、気候的には赤道直下にあつて高温多湿なので島の大部分がジャングルや湿原におおわれ、居住の適地や内部への交通を著しく制限することにより、外からの移住者のほとんどは大きな川の河口へ集中する結果となつた。そこで追われた先住民は密林の中で彼ら自身の文化を保ちながら今日に至ることができたのであろう。この人々の生活を知ることが我が計画の目的の一つである。

今日われわれはこの人達を未開民族と呼び、その社会を未開社会と呼んで、現代文明に生きることの優越性を認識し、安心する傾向があることを否むわけにいかない。産業革命以後、交通機関や



情報網などの発達めざましく、急速に世界が狭
 められつつある今日、それにまつたく比例して所
 謂『西ヨーロッパの文明』が全世界を覆いつくそ
 うとしているけれど、それは果して人類にとって
 最も幸福なことなのであろうか？ここでひとつ
 考え直して見るのもあながち時間の浪費とも思え
 ない。

本来、我々の住む地上は自然も人間も共に大なる
 多様性を有するものであつたということは周知の
 通りである。特に、この東南アジアと呼ばれる
 地域は地理的にも、民族的にも、文化的にも、ま

もの（タイ北部のビー・トン・ルアン、マライの
 セマン、スマトラのスノイ、セレベスのクバヤト
 アラ、ボルネオのネシオト・ブナンなど）から、
 ごく初歩的な植物栽培の段階にあるもの、さらに
 インドやシナの文化、イスラム文化の影響を受け
 た高度な文化段階の生活を営んでいるものまで、
 その種類は様々である。

しかるに今や一方では、全世界的規模に於いて
 人間集団のこの多様性に逆らうように、意識的に
 あるいは無意識的に、それを一様化しようとする
 動きが著く、それは結局非欧米地域の欧米化と言

うことであり、しかも、それを「近代化」と称してもはやすのが現状なのである。このままでは『未開』は『文明』に遠からず、完全に駆逐されてしまうであろうことは想像に難くない。それは人間にとって最もよろこぶべき状態なのであろうか？我々はよく考えてみなければならない。

以上述べたような事は、その渦中に存在する人間の一人としての私の最も関心ある問題であり、この問題意識をもつて探検部においてもこれまで活動を行なってきたし、これからそうあるつもりである。私はこのような背景でこの度の「カリマンタン遠征計画」に参加し、その対象を前述のボルネオへの最も古い移住者の一種すなわち未だ農耕を知ることなしに広大なジャングルを漂泊放浪し、狩猟と採集に依つて動物や果実などを糧とする生活を今日も営んでいると思われるネシオ・プナン(Nesiot Punan)に求めたのである。

こうして我々の隊の主な目標は決まった。あとはそれを実現させるための具体的な事柄の検討である。やるべきことは大きく別けて二通り、ひとつはカリマンタン(フィールド)へ行くための手段方法手続きと、今ひとつはカリマンタン(フィールド)での実際的な行動予定の立案検討である。勿論その間もできるかぎりの予備知識吸収、資料収集などを続けなければならないことは言うまでもない。

こうして最初の段階で計画は着々とおもしろいように進行し、私は毎晩のようにジャングルの中の自分を夢に見た。先に挙げた問題も前者の方は別にたいした問題ではないかの如く思えたし、その頃の私にとってボルネオは目前であつた。アメリカ空軍の百万分の一の地図(USAF OPERATIONAL NAVIGATION CHART)を前にして奥地へのアプローチを検討する私は正に有頂

天であつた。

何れにせよ奥地を訪れるには大きな川をたどるより方法がないことは明らかである。そしてその可能性を持つ川は四本、ポンティアナからのカブアス川(1,065Km)、バンジャルマシンからのバリト川(725Km)、サマリンダからのマハカム川(840Km)、タラカンからのカヤン川がそれである。このうちカブアスとカヤンは対マレーシア紛争による政治的軍事的事情のためにまず利用不可能であるので残るのはマハカムかバリトとすることになる。それでは、両方の川の状態は？ジャングルというがそれはどのようなものか？充分利用できる舟はあるのか？途中の集落はどの程度のものか？食料事情は？現地で必要な費用は？

— etc. 多くの本に当り、様々な人に会つて情報を集めた。しかしこの方面に於ける日本語の文献資料の乏しさは驚くべきものであつたし、今日のカリマンタンについて充分詳しい人にはほとんど会うことができなかったけれど、そのことは私にますますフアイトを湧かすばかりで、カリマンタンまで我々を乗せて行つてくれる貨物船がなかなか見つからないことなど、そんなものはすぐにも見つかるさと別段気に止めることもなく樂觀していたものだつた。

だが、その夢見心地も長くは続かなかつた。先輩M氏とビザのことで駐日インドネシア大使館を訪れた時、私ははじめて現実の厳しさを知らされたのだ。計画書を示して計画の概要を説明し、そのための入国査証をもらいたい旨を述べると、それに対する答えは一1

「諸君のその若い情熱は大いに評価されて然るべきものである。しかし諸君も御承知のように現在カリマンタン地区は開発途上の地域であり、従つてその治安状態は極めて悪く、外国人の生命財産を保障できかねるのが現状である故、残念だが

諸君は計画を変更されることが望ましい。」

と言うことであった。

それでは、と言うわけで今度は外務省に助けを求めると

「（早稲田大学をはじめとする二～三の日本の大学も以前にカリマンタン遠征を企てたけれど、いずれもジャカルタで足止めを食つてカリマンタンへの入域を拒否された上、ジャカルタの日本大使館に多大の迷惑をかけたという前例を示した後）諸君がインドネシアの許可を得てきたならば、その時は当方としても協力を惜しまないであろう。」

そういう例を知っているからこそ、迷惑をかけたくないからこそ事前に頼みに来たんだが、結局ややこしいことは一切やめてくれということか。それでは外務省でももつと地位の高い人に相談しては。ということになり、後日然るべき人を通じて或る著名な国会議員に紹介を依頼したところ、その人の秘書氏は御親切にも私の考えの誤りを指摘してこう宣うたことだ。

「外務省の高官は諸君のためにおるのではない」

嗚呼 官僚主義万歳！

こうして、それまで順調であるかの如く思えた我々の計画も、あつけなく暗礁に乗り上げてしまった。ビザが無い以上インドネシアには入国することさえできないではないか。

そうして約一年が過ぎ、我々もカリマンタンはもう諦めざるを得ないのではなからうかと考えはじめた頃、ひよんなことから耳よりな情報を得た。我々をボルネオまで乗せてくれる貨物船が見つかったのである。ビザも『観光ビザ』なら何とかあるという。棄てる神あらばひろう神ありである。

だが、それまでに集めた情報資料を検討したところ、そもそも絶対量の少ないことに加えてそれは実にまちまちですこぶる普遍性に欠けるところから、それにビザが観光ビザであるし、今回は正

確な最新の情報を得ることと、アプローチの偵察とを目的とした予備偵察として3名がとりあえず派遣されることとなつたのである。

出発までの数ヶ月も決して平穩ではなかつた。まず中断していたインドネシア語の勉強の再開、必要装備・食糧・医薬品の検討購入、渡航手続、連絡網の作成、大学の紛争、試験、そしていちばん我々を悩ませたのは船の出航予定が猫の目のようにくるくる変ること。結果その船には那覇から乗ることになり、とにかく、あれやこれやと出航当日まですつたもんだしながらも、なんとか日本を出ることができたのは、我々三人の努力だけでないことは、我々三人が最もよく知っている。同輩諸君には勿論のこと、先輩にも、先生にも、クラブ関係以外の人々にも非常な御協力をいただいたことを今私は鮮やかに思い出すことができる。ありがたいことだと思う。その結果として私はカリマンタンの土を踏むことができるのだ。



どこまでも果てることなく広がる大湿原を左右に分けて褐色の水路が奥へと続く。

マハカム川である。

「とうとうやつてきた。」

という感激と同時に

「とうとう来てしまつたのか。」

という、言わば長い間の夢が一気に実現した時の「とまどい」に似た一種の安心感とが一瞬交錯して消えた。今や現実なのだ。

まつたく透明で且つ強烈無比な太陽光線。その下に広がるジャングルの緑が私の目を射る。私はこれに似た湿原をかつて北海道の根釧原野に見たことがあるがそのスケールだけに於いても北海道のそれは箱庭にもたとえることができよう。それよりも風土、否、自然そのものがここと日本では明らかに異なることを痛切に感じたことだ。



そんな事はおかまいなしに我々を乗せた三千トンの悠光丸は静かに川を遡る。舳先に立つと、後方のエンジンの音も振動も伝つてはこないし、まっすぐ進んで来て静かにゆつくりと両側に流れてゆく景色に見とれているとついにシネマ映画の劇場に座っているような錯覚にとらわれて「はつ」とすることも二度、三度。まだ実感度が足りないらしい。河畔に点々と人家が見える。カヌーに乗った子供が何やら叫びながら手を振る。家は水ぎわにニツバヤシの葉で葺いた屋根を持つ所謂「ニツバハウス」。今日の日本の規準で見れば、むしろみずばらしい堀立小屋だけれど、この光の下、褐色の水のほとりで密林を背にした時、この家は俄然その位置を得るから不思議だ。ここに日本の農家を持つてきたとしたら、きつと不自然で落着きのないものになろう。人間の生活が本来如何に自然と密着したものであるか、そして現代、人間はその生活に於いて自然を凌駕征服しつつあるかのごとき錯覚に陥っているが、それが如何に不遜な錯覚であるかをもう一度よく考えてみるべきではあるまいか。

そしてこのマハカム川を遡ること800Kmの密林に、生活の糧を採集しながら放浪し、文字通り自然と一体化した原始共産の生活を営む人々と相目見えることのできることを思うと、かすかな戦慄

を禁じ得ない私ではあつた。

しかしながら、その大きな期待を一時に粉碎してしまうに充分な「予期せぬ出来事」が間もなく我々の身の上にふりかかつて来ようことなど「神のみぞ知る」ことであつて、半分夢見心地の私などに予想できようはずもなく、船は第一の寄港地であるサマリダの沖合(といつても川の中央部であるが)に錨を降した。



しばらく待つうちに税関吏が乗り込んで来て食堂でパスポートの検査。例外なく口ひげをたくわえた十人の検査官の前で私は多々緊張したが、後でチヨフサー(一等航海士)に聞けば、仕事はせいぜい二人で充分事足りるのに船で出す「リング」欲しさに十人もの大部隊が乗込んでくるのだとか、事の真偽はさておき、それを聞いた途端に仰々しく並んだ税関吏が妙にこつけいで、又愛すべき人達であることを思つたことだ。そういえばここではリングを買おうにもまず不可能だ。

さて、サマリダは人口六万人、東カリマンタン州の行政の中心地といわれ、森林開発の基地の一つでもあり、その殆んどが日本に運ばれている。我々の乗つた悠光丸もその木材を日本に運ぶためにやつてきた船の中の一隻である。この船はここサマリダと更に100Km南下してバリクババンとに寄港の予定であつた。周知の如く貨物船というものはその運行予定を積荷に負うところが大きい、特にカリマンタンに於ける木材の切出し方法は、雨に依る川の増水を利用して河口に集める方法なので、その傾向ははなはだ著しいものがある。極端に言えば、その船の正確な運行予定は誰にもわかつていないのである。船を進める最高責任者たる船長でさえ、自分の船がどこへ行くのかを正確には知ることができないという、まったくもつて奇妙なことになつているのである。人は積

荷を動かしているのか、それとも積荷に動かされているのか — 今日の船長という職業は、タクシーの運転手に酷似していると思われる。

私達の上陸予定地はサマリングではなくバリクババンであつた。 — 今回の我々の予定にはサマリング訪問も重要な目的の一つにはいつていたが、何分にもここには外国人のための入口に当るイミグレーション（出入国管理庁）が無いのでそのあるバリクババンに上陸してから改めて訪れる予定であつたのだ — 東京の本社も船長も勿論私達もそのつもりであつた。現にサマリング入港二日前にバリクババンに寄港する旨、我々がそこで下船する由確認の電報を東京から受取つたばかりなのである。

それなのに、例の積荷の都合による予定変更というやつで、第2の寄港地が南のバリクババンから北のボンタンへ突然変わつてしまつたのだ。これには私達も驚いたけれど船長にとつてもこれは正に晴天の霹靂であつた。電報で東京に問い合わせようにも停泊中の船の通信機類は軍の命令によつてすべて封印されているのでどうにもならぬ。「かくなる上は」と運を天に任せて我々は下船し悠光丸はボンタンへ、そして日本へ向つて川を下つて行つた。

さて、下船はしたもののイミグレーションの無い港から入国しようということは、他人の家に窓からはいろうとするようなものである。そもそも外国からの船が、たとえそれが貨物船だけであろうとも、入港する港に、それも州の行政の中心地といわれるところに荷物の出入口（税関）だけあつて人間の出入口（出入国管理庁）がないのもおかしい話だが、それを押してなんとか入国しようというのだから事に依つてはスパイの疑いをかけられても仕方ないことであろうし、またインドネシアの役人としても、直接関係あるのは税関と警

察であるが、前例のないことなのできつと扱いかねたに違いない。それで、最初私達がここに上陸したい旨を申し入れると「折り返し直ちに帰国されたい。」との返事であつた。しかし、木材買付けの仕事で来ている三菱商事の駐在員の方の取り成しで、「とりあえず警察がバリクババンまで護送するから、諸君はそこで正式な入国手続をされるがよからう。」ということになつた。汚職の全く無い国はあるまいが、インドネシアの場合、350年に渡るオランダの植民政策の所為か、特にそれが著しいようである。それどころか、国家が公務員のアルバイトを奨励しているのだという噂もあるが、半ば公然とそれを要求する役人を見るとその噂もあながち嘘とも思えない。私達の場合も、その慣例に従わざるを得ない場面に幾度か出会つたのである。そうして翌朝出発ということになり、その場から私達を護衛（監視？）すべくピストルを持つた私服警官が一人つけられた。名をヨナといい、バリ島出身23歳とのこと。彼によつて私達は出発までホテルの一室に軟禁状態となつた。それも一日の辛抱と諦めていたところ、バリクババンへ出発の直前になつて突然、出発は中止せよとの伝令。何のことかとヨナ君に聞いたところ、

「上司の命令であるから。」

というだけで一向に要領を得ないので警察当局に説明を求めると、でつぷりと太つた外事課のボスは、

「諸君にはまことに申し分けないが、実は運悪くバリクババンからイミグレーションの係官がやつてきたので諸君のことを報告すると『警察は勝手なことをするな』と大いに怒っているので云々……………」

翌日、当のイミグレーションの係官殿に会見を申し入れ、当方の事情を説明し、それを拒否され

た理由を求めると、制服に身を固め口ひげをたくわえて紳士然としたその係官は

「諸君には気の毒だが、我が国の最も新しい法律によると云々……。」

結局、法的には私達がサマリダより上陸しようとしたことは違法ではなかったが、前例のないことだし、税関及び警察にその法律が徹底していなかったことにより正当な手続きが成されなかったもので、もはや我々には入国する権利を失なってしまった。残念だが早々に帰国されたいとのことだった。

それを聞いて我々はそのズサンさと、ゆうずうのきかなさとに大いに憤慨したけれども、もしその勧告に従わない場合は強制送還という、諸君にとつてまことに気の毒なことになるやも知れめと言われれば、我々とてもそれ以上我を通すわけにゆかぬ。涙をのんで引きさがるほかない。実に残念である。

さて、今私はここに「アジアの十字路」という題名の一冊の本を持っている。これは1964年にNHKの特別報道班がインドネシアとマレーシアを取材したときの記録であるが、戦後日本で出版されたカリマンタンに関する記事のある数少ない本の中の一冊である。そしてこれによると、この三人の報道班はバンジャルマシン、バリクパバン、サマリダを訪れる予定であつたが、彼らは取材に先立つてジャカルタの「インドネシア統合参謀本部」から「お墨付き」を貰つてから飛行機に乗り込んだ。バンジャルマシンで三泊四日を過ぎた後バリクパバンに飛んだが「佐野カメラマンが飛行機から降りてカメラをかまえると、兵隊がとんできて止めた。ここでは飛行場に限らず、町でも軍の許可がなければ一切撮影は禁止されていると告げた」ので軍司令部へゆきバリクパバンの町の模様とサマリダ地域の森林開発の模様を撮

ることの許可を得た。

「ところが、この“OK”は撮影開始の直前になつて、あつさりひつくり返され、軍司令官命令で撮影は全面禁止という事態になつた」ので抗議を申し入れ、その理由をたずねると、

相手方は

「新事態により」

の一点張りであつたので尚も追及すると

「君たちはインドネシア軍の組織と権限に干渉するのか」

と応じてきたので「これ以上相手を追求すればへたをするとバンジャルマシンで撮影したフィルムまでるいの及ぶ恐れがあるばかりでなく、生殺与奪の権を握る軍に帰途の飛行便を押えられる心配があつた」ので「文字通り涙をのんで私たちはここでの撮影を一切あきらめざるを得なかつた。ゲストハウスに送り返された私たちは、それから飛行便を待つ間の二日間、L・スタジ中尉と二人の武装した将校のきびしい監視下に、文字どおり軟禁されたのである。」と書いている。

げに、国家とは何とめんど臭いものよ！一つの地球上を移動するのにビザやパスポートが必要なくなるのはいつのことであろうか？

日本へ帰る船の中で、大きな精神的疲労を覚えながらも私はしきりにこう考えたものだ。

そしてこの度は不運にも所期の目的を充分には、はたすことはできなかつたけれど、この計画を通じて私は多くを体験し、そして多くを学ぶことができた。船の中で我々は今回のカリマンタン行の総括をおこないながら、再びカリマンタンを訪れる決意を新たに、改めて計画を練り直しながら新しいファイトの湧いてくるのを実感するのである。

明るく澄んだ目をいつばいに捻げて別れの握手をしてくれたホテル・マハカムのボーイ“アドウ

ル君、三菱商事のスピードボートの運転手で熱心な回教徒の“ハナフイ君”はいずれも私達と同年輩である。そしてサマリダの街で知り合いになった多くの人々。我々のしやべる片言のインドネシア語がおかしいと言つて、からだ全体で笑う人々。日本の規準で言えば、なるほど彼らの生活は確かに貧しいけれど、素晴らしく豊かで明るい心を持つてゐるではないか。大阪の通勤時の電車の中の人々の顔を思い出すとき、現代物質文明は、ほんとに我々にとつて至上のものであるのかと、問いかけることを止めるわけにゆかないのである。

おわりに

以上、カリマンタンについてあれや、これやと書いてきたつもりだが何分にも、「書くこと」に未熟なため思うところを充分に表わすことができず、結局、穴長な、まとまりのない雑文に終つてしまったことを認めないわけにゆかない。

しかし、この雑文によつて「カリマンタン計画」なり、それに対する私の気持なりが多少とも理解されるならば、又これを読まれた人の間に何らかの議論の余地が見出されるならば、これを書いた者にとつては過分の喜びであり、さらに、多くの

忌憚のない御意見を戴ければ幸甚である。

さて、今年の四月に不本意な帰国をしてより早八ヶ月余が過ぎ、もうすぐ新しい年昭和45年を迎えようとしているが、私が冷たい風にコートのお襟を立てる今日も、サマリダの子供達はあの太陽の下で水遊びに興じているであろう。かつてインドを目指して船出したコロンブスは北緯7°の暑さを次のように書残している。

「燃えるような暑さのために、船倉におりていくことは不可能になり、水や葡萄酒の樽は破裂し、穀物は燃え、ラードや干し肉は1週間ものあいだこげつつけた。太陽があまりに強烈だつたので、乗組員は生きたまま焼かれるのではないかと思つた……。」

この極端に誇張された記録を読む時、私はあのカリマンタンの暑さが膚に蘇るのをはつきりと感ずる。

かくて私達は再度カリマンタンを目指して目下鋭意準備中である。ついでには現役部員諸君、先輩諸氏をはじめ何らかの点で私達に同意される方々の暖かい御協力を接をお願いする次第である。

(社会学部三回生)

